

イチゴ新品種 ‘紀の香（きのか）’ の特性

～極早生で炭疽病に強い新品種を育成～

1. はじめに

県内のイチゴ主要品種は‘さちのか’と‘まりひめ’であるが、‘さちのか’は晩生で収量性が低い、‘まりひめ’は炭疽病に弱いという欠点があり、現場からは炭疽病に強く市場性、収量性の高い品種の育成が望まれている。そこで、2012年度から新品種の育成に取り組み、新たに‘紀の香’を育成した。ここでは、‘紀の香’の特性について報告する。

2. 育成経過

2012年に炭疽病に強い‘かおり野’を母親に、果実品質に優れる‘こいのか’を父親として交配した。得られた種子から実生9654株を育成し、果実品質により462個体を一次選抜した。2013年には、早晩性や果実品質、炭疽病耐病性から10系統を二次選抜した。2014年には、収量性、栽培特性により有望な3系統を選抜した。

2015年には選抜した3系統について、県内の農家6戸で現地における栽培適応性を確認するとともに、イチゴ生産者等関係者による品種検討会を経て、系統I 2 1を品種登録候補として最終選抜し、2016年3月に品種名‘紀の香’として品種登録出願を行った。

3. 品種特性

(1) 早晩性

‘紀の香’の頂花房頂花の開花期および収穫期は2014年、2015年ともに親品種よりも早く、県主要品種の‘さちのか’、‘まりひめ’と比べて半月から約1ヶ月早く収穫できる(表1)。

表1 ‘紀の香’の頂花房頂花の平均開花日と収穫始期

品種名	2014年		2015年	
	平均開花日	収穫始期	平均開花日	収穫始期
紀の香	10月27日	11月28日	10月16日	11月14日
かおり野	10月31日	12月6日	10月19日	11月16日
こいのか	11月3日	-	10月31日	12月5日
まりひめ	11月5日	12月14日	11月2日	12月6日
さちのか	11月10日	1月2日	11月8日	12月17日

※2014年は9月18日に一斉定植した(‘さちのか’のみ9月22日定植)。
2015年は花芽分化確認後に定植。

(2) 収量性

‘紀の香’は11月中旬から頂果房の収穫が始まり、年内収量は‘まりひめ’よりも多い。月別収量は、‘まりひめ’に比べると、‘紀の香’は頂果房の収穫後半となる12月の収量は少ないが、‘まりひめ’の収量が最も少ない2月には‘紀の香’の方が多(図1)。

また、‘まりひめ’や‘さちのか’は果房あたりの収量が多い果数型であるのに対して、‘紀の香’は年内に頂果房の収穫が終了、1月に第1腋果房が収穫でき、以降順次果房が続いて出現する果房数型の収穫パターンを示す(図2)。

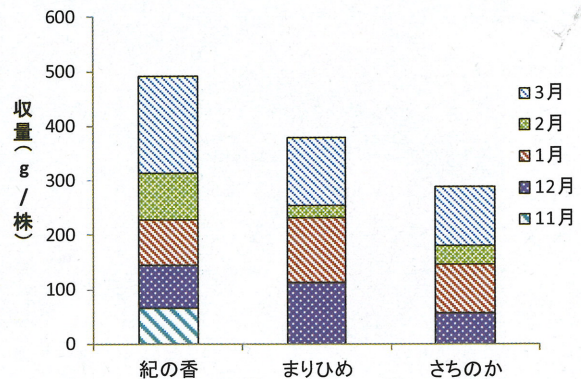


図1 ‘紀の香’の時期別収量(2015)

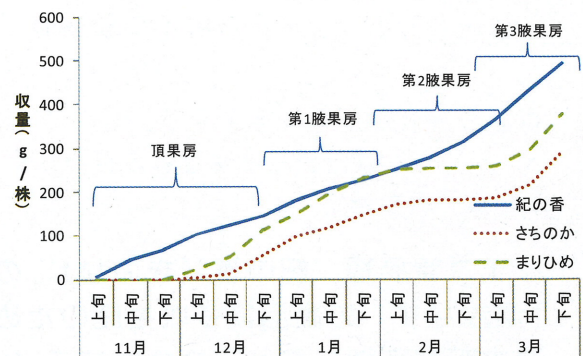


図2 ‘紀の香’の累計収量と収穫果房の推移(2015)

※果房表示は、‘紀の香’の収穫果房

(3) 果実の特性

外果皮色は‘まりひめ’よりも明るい赤橙色で、内果皮は外周部から内部に向かってやや赤く着色する(図3)。果実は‘さちのか’に近い硬さで、平均果実重は‘さちのか(14.6g)’より大きく‘まりひめ(17.5g)’よりやや小さい17.2gである(データ省略)。



図3 ‘紀の香’の果実外観と内部の様子

(4) 糖度および酸含量

糖度は収穫初期にやや低いが、12月下旬以降は‘さちのか’と同等で、‘まりひめ’よりやや高くなる。1月以降も‘まりひめ’、‘さちのか’と同等で推移する(図4)。

酸含量は栽培期間を通じて‘まりひめ’より多く、‘さちのか’と同等以上で推移する(図5)。

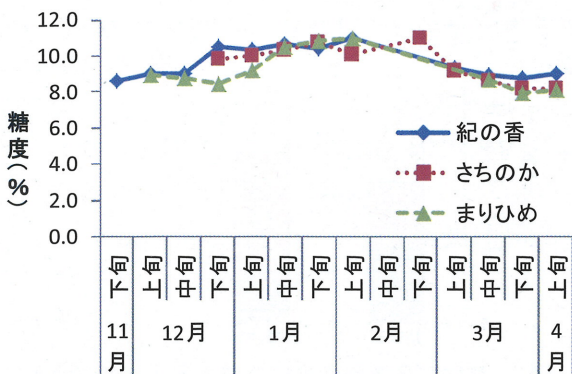


図4 ‘紀の香’果実の糖度の推移(2015)

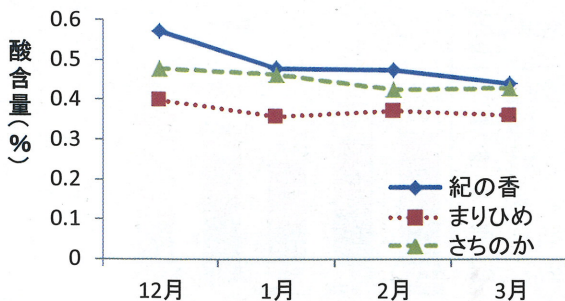


図5 ‘紀の香’果実の酸含量の推移(2015)

※酸はクエン酸に換算

(5) 炭疽病耐病性

炭疽病に対して罹病性であるが、‘まりひめ’よりも強く、県内で最も多く栽培されている‘さちのか’と同等である(図6)。栽培の際は、‘さちのか’と同等以上の炭疽病対策が必要である。

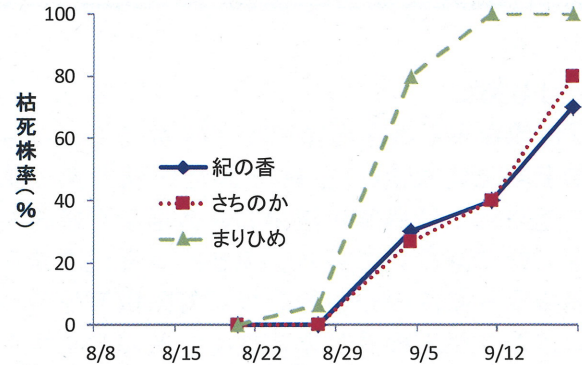


図6 ‘紀の香’の炭疽病耐病性(2014)

※接種日:2014年8月8日

4. 今後の方向

‘紀の香’は、これまで栽培されてきた‘さちのか’や‘まりひめ’とは栽培特性や果実品質が異なる品種である。今回紹介した以外にも、厳寒期の草勢維持対策や果実品質向上技術など解決すべき課題があり、早期の栽培技術開発に取り組んでいく。今後は、県内農家での試作を継続するとともに、農家の栽培希望に添えるよう親株の増殖を進めていく。

5. 最後に

‘紀の香’は‘まりひめ’に次いで県オリジナルの品種として育成された。炭疽病に強く、年内の早期収量が期待でき、生産性の高い点を提案していきたい。

また、今後ともイチゴの品種育成を進め、さらなる優良品種開発を目指していく。

(栽培部 東卓弥)